



「目に見える成果」を求められる先生たち 秋田洋和

あきた・ひろかず

1966年生まれ。進学塾講師。高校受験数学・中学受験算数を教える。都内公立中高一貫校土曜講座の授業や、私立中学の教務コンサルタント等、塾の教室を飛び越えて幅広く活躍中。著書に『品格ある子どもの育て方』(PHP文庫)がある。

社会は大きく動いています。社会や経済の急激な変化は、地域や家庭、そして教育にも大きな影響を与え、子どもを取り巻く環境にも及んでいます。ここでは、ますます複雑かつ多様化してきている教育の現場について、お伝えしていきます。

最近では脳トレブームとやらで、連日TVでもクイズ番組が放映されています。その影響なのかどうなのか、小中学生の英検・漢検の受験率が高まっている雰囲気も、自分の周辺だけでもヒシヒシと感じるようになってきました。そんな中、新聞やTVを賑わせたのが、都内私立中学で起きた「英検不正受験」の問題です。何をやったかといえは、自校が英検会場になっていることを利用して、届いた試験問題を教師が事前に見て生徒に指導していたのです。英検の前日や前々日に生徒を集めて「対策講座」を開催し、問題の中から難しい単語や熟語を取り出し、板書したりプリントを配ったりしていたそうです。

「こんなことをしても生徒のためにならないでしょ」と考える人がほとんどだろうと推測するのですが、どうしてこの学校の先生方は不正に走ってしまったのでしょうか。その背景として、私は「追い詰められた先生」の姿を想像してしまっています。

先生に求められるもの

私が最初にこの報道を目にしたとき、「まあ、あることだろうね」という感想を持ちました。この学校の詳しい事情を取材したわけではないので、ここからは私の推測になります。その理由は二つあります。

一つ目は「合格率が先生の評価につながっ

ている」可能性が高いということです。特に私立中学・高校の場合には、常に「評価」がついてまわります。生徒・保護者による「先生への通信簿(アンケート)」を実施している学校も、私を知る限りでも増えています。先生に要求される最も大きな要素として、「成績をしっかりとあげること」が年々大きくなってきていることは事実ですから、塾と同様に「しっかりと合格させることのできる教師」が高評価を受けるシステムを採用している学校(私立)が、急激に増加していると予想できます。

英検・漢検の合格率はアピールポイント

では、学校はどうして高い合格率にこだわる必要があるのでしょうか。これが二つ目の理由です。それは、「合格率の高さを学校のアピールポイント」にしたいからです。

例えば灘や開成といった有名校であれば、強烈な大学合格実績を誇りますから、わざわざ英検や漢検の合格率を公表しなくても、充分に受験生や保護者の信頼を得ることができます。それに対して、現時点で大学合格実績がふるわない学校、特に「これから進学校にシフトしていきます」という学校の場合、いくら説明会等で素晴らしい方針を打ち出したとしても、「成績が伸びていません」という客観的資料を提示できなければ

当然ながらその信頼度は下がってしまいません。そうした学校にとって、最も手っ取り早く準備できて世間へのアピールにもなる資料、それが英検・漢検なのです。

報道によれば「不正指導は2級と準2級を受ける中3、高1が主な対象だったが、中2にも指導した可能性がある」とのことです。このことから考えると、今回報道された学校では「2級と準2級の合格率を高めたかった」ことが推測できます。

この理由は明確で、例えば都内私立大学の推薦入試において「英検が何らかの優遇措置になっている」場合、そのほとんどが「英検準2級以上」となっています。現実には中学生でも準2級をとる生徒もいますから、英検2級を「大学受験レベルの学力」の基準だと考えれば、このレベルに高1段階で到達している生徒の比率が高いことは、学校にとっては「保護者の信頼を得るアピールポイント」になるわけです。

この二つの要素が組み合わさると、先生へのプレッシャーはかなり強いものになります。特に「これから進学校にシフトしていこう」とする学校の場合は、これまでのんびりやってきた業務内容を全面的に見直すことも必要ですし、先生の自己研鑽（特に授業力）が何より重要になってきます。

「学校で教えることは勉強だけではない」

と主張される先生も多いのですが、特に私立の場合には経営的側面を無視することはできませんから、最悪の場合こうした主張は「成績が伸びない言い訳」ととられてしまう場合もあるでしょう。

成果を求められる学校 教師

覚えておられる方もいらっしゃると思うのですが、2007年には東京都足立区の公立小学校でも不正騒ぎがありました。区や都の学力テストの際に、教師が誤答している児童に合図するなどの不正行為を行っていたというものです。この背景には、足立区が「学力テストの成績の伸び率を、学校への予算査定基準の一つにする方式」を打ち出したことがありました。04年2月の都の学力テストで23区中最下位になったことを受けて、学校間の競争の仕組みとして導入しようとしたのです。校長はじめ先生にどれほどのプレッシャーがかかったことでしょうか。

こうして成果を求められるようになった先生が、自己研鑽不足があったかどうかは別として、生徒のレベルと試験の問題を擦り合わせたときに危機感を持てば、不正をしない確率が100%になるかといえ、残念ながらそうとは言えないと思います。今後もこうした不正行為が表面化する

ことがあるでしょう。この場で「教育現場と成果主義の是非」を訴えるつもりはさらさらありませんが、少なくとも言えることは「自分の子どもに正々堂々と受験させられる環境」を探すことも、今後は保護者として意識しなければならぬ時代がすぐによってくるだろうということだと思います。それくらい学校も塾も玉石混交の時代なのです。

英検資格取得者優遇校の推移(校)

	高等学校	短期大学	大学
18年度	732	183	350
19年度	860	190	351
20年度	783	196	372

英検年度別受験者数(人)

	1級	準1級	2級	準2級
17年度	22,033	68,614	316,323	514,158
18年度	24,076	71,211	318,099	509,872
19年度	24,967	69,469	310,726	511,742

漢検受験者数(人)

	1級	準1級	2級	準2級
19年度第3回	1,322	6,686	90,513	132,865
20年度第1回	1,495	7,702	112,029	166,480
20年度第2回	1,372	7,156	102,887	177,685

21年度漢検資格取得者を評価対象に採用した学校・学部・学科数

大学・短期大学	490校 1,079学部・学科
高等学校	608校

日本英語検定協会・日本漢字能力検定協会調べより作成